

令和7年度 京都府立大学 一般選抜試験（前期日程）
入学者選抜学力検査 「歴史」

【日本史】

○解答例・出題意図・配点

① （配点 100 点）

- 問1 環状列石（4） 問2 四隅突出型墳丘墓（4） 問3 群集墳（4）
問4 大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）（4） 問5 国分寺建立（4） 問6 東大寺（4）
問7 道鏡（4） 問8 行基（4）
問9 764年に孝謙太上天皇と恵美押勝とが対立し、武力衝突の結果、恵美押勝が鎮圧され敗死した事件（8）
問10 （観応）半済令（4） 問11 大犯三カ条（4） 問12 国人（4）
問13 （国人）一揆（4）／傘連判（状）（車連判状も可）（4）
問14 探幽（4） 問15 酒井田柿右衛門（4） 問16 松永貞徳（4）
問17 風神雷神図（屏風）（4） 問18 文禄・慶長の役（壬辰倭乱、丁酉倭乱、朝鮮侵略も可）（4）
問19 小林一茶（4） 問20 北越雪譜（4） 問21 葛飾北斎（4） 問22 ゴッホ（4）
問23 本陣（4）

② （配点 歴史学科は120点，他学科は60点）

- 問1 村田珠光（3） 問2 禅（臨済も可）（3） 問3 足利義政（3） 問4 同朋衆（3）
問5 北村季吟（3） 問6 ロシア（3） 問7 イギリス（3） 問8 寺請制度（宗門改も可）（3）
問9 異国船打払令（無二念打払令）（3） モリソン号（3） 問10 台湾銀行（3）
問11 関東大震災のために現金化できなくなった手形。日銀によるこの処理が不首尾に終わり、金融恐慌の遠因となった。（6）
問12 大蔵大臣＝片岡直温（3）、 内閣総理大臣＝若槻礼次郎（3）
問13 樺太（サハリンも可）（3） 問14 国際連合（3） 問15 李承晩（3）
問16 奄美群島（諸島）（3） 問17 サンフランシスコ平和条約（3）

③ （配点 歴史学科は60点，他学科は40点）

出題意図：狙い：日英同盟を基軸に、国際社会が19世紀的旧外交（二国間・数か国間の同盟・協商が乱立し、それらのパワーバランスで国際社会が動いていく体制、帝国主義の極致）から20世紀的新外交（多国間の協調によって国際社会の問題を解決していく体制）へ転換していく流れを問うた。時系列的な正確さおよび「ロシア」「ドイツ」とイギリスの関係、「二十一か条の要求」「ワシントン体制」を説明する際に日英同盟との絡みを説明できていることなどが採点ポイントとなる。

④ （配点 歴史学科のみ、120点）

(A) 出題意図：7世紀にはめまぐるしく宮都が変遷したが、本問ではどのような政治的な流れで遷都が行われたかというのを、国内のみならず国際情勢をも踏まえて、時系列的に記述できているかを中心に問うた。提示された用語を用いて、政治・外交の展開と宮都の変遷を結びつけて論述できているかが採点のポイントになる。

(B) 出題意図：本問は、9世紀から11世紀にかけての武士の成長の特徴を論述させる設問である。武士が誕生して成長していく過程を正確に理解した上で、提示されているキーワード(重要な用語)を

用いてそれを論理的に論述できているかどうかを評価の目安としている。武士が成長していった経緯とその社会背景、武士・武士団の役割などが理解できているかがポイントとなる。

【世界史】

○解答例・出題意図・配点

① (配点 100 点)

- 問1 直立二足歩行 問2 ラスコー 問3 周口店上洞
問4 1492 問5 アメリゴ＝ヴェスプッチ
問6 アステカ王国：コルテス インカ帝国：ピサロ（両方正解で4点） 問7 エンコミエンダ
問8 スキタイ 問9 冒頓単于 問10 劉邦（高祖）
問11 ガウタマ＝シッダータ（ブッダ） 問12 ナーランダー僧院
問13 アジャンター石窟寺院 問14 バクティ 問15 玄奘
問16 アルクイン 問17 ローランの歌 問18 プランタジネット朝
問19 トウルバドゥール 吟遊詩人
問20 ダンテ 問21 デカメロン 問22 ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語
問23 愚神礼賛 問24 ヘンリ8世 問25 トスカネッリ

② (配点 歴史学科は120点、他学科は60点)

- 問1 救世主 問2 ネロ帝 問3 コイネー
問4 シトー 問5 イブヌ＝ルシュド
問6 普遍的なものは存在せず、個物につけられた名前にすぎないとする立場。
問7 アンセルムス 問8 ボローニャ大学
問9 バタヴィア 問10 アユタヤ朝（アユタヤ王国） 問11 チュラロンコン大王（ラーマ5世）
問12 ムラヴィヨフ 問13 北京条約 問14 ウラジヴォストク
問15 新文化運動 問16 陳独秀 問17 白話 問18 『阿Q正伝』 もしくは『狂人日記』

③ (配点 歴史学科は60点、他学科は40点)

狙い：日英同盟を基軸に、国際社会が19世紀的旧外交（二国間・数か国間の同盟・協商が乱立し、それらのパワーバランスで国際社会が動いていく体制、帝国主義の極致）から20世紀的新外交（多国間の協調によって国際社会の問題を解決していく体制）へ転換していく流れを問う

採点のポイント

- ・時系列を正しく抑えていれば40点／30点
- ・各語句に加え、「ロシア」「ドイツ」とイギリスの関係、「二十一か条の要求」「ワシントン体制」を説明する際に日英同盟との絡みを説明できていれば10点／5点加点
- ・上記の「狙い」にまで踏み込めていればさらに10点／5点加点
- ・誤字、事実誤認等があるごとに減点

解答例

19世紀末の朝鮮でロシアの影響を受けて大韓帝国（韓国）が成立すると、これ以降韓国での権益をめぐって日本とロシアは激しく対立した。日本は極東でのロシアへの対抗のため、1902年に日英同盟を結び、極東における相互の権益を認め合った（清韓の独立を守る、日英両国の清韓における権益を保全する、これをめぐって他の一国と戦争になった場合にはもう一方の国は中立を守ること、他の国が戦争に加わる場合には協同して戦うことなど書けていれば加点）後、日露戦争開戦に踏み切った。一方、日露戦争を受けて、極東における日本の台頭を警戒したイギリスは、それまでの対立関係を解

消し、1907年にロシアと手を組み、フランスも加えた三国協商を形成した。これにより、西欧列強は英・仏・露の三国協商と独・墺・伊の三国同盟の二極対立構造となった。この対立の焦点となったバルカン半島で1914年に起こったサラエヴォ事件をきっかけに1914年第一次世界大戦が勃発すると、極東では日英同盟を根拠に日本が参戦する。日本はドイツに宣戦布告し、山東省にあったドイツの拠点・青島を占領すると、中国政府に対して二十一か条の要求を突きつけた。このように、第一次世界大戦中の日本は西欧列強との同盟関係を背景にした帝国主義的外交を展開していたが、大戦後の国際社会は個別の同盟ではなく（日英同盟の破棄、などを含意、これを書いてもOK）多国間の国際協調を基軸としたワシントン体制に移行し、日本もその中に組み込まれていく。

4 （配点 歴史学科のみ、120点）

(A)

ローマ帝国では、五賢帝最後の皇帝であるマルクス=アウレリウス=アントニヌスの時代より、帝国内に侵入してくるゲルマン人や、ササン朝ペルシアとの戦争が繰り返されるようになった。3世紀になると、異民族の侵入に対応する各属州の軍隊の中から、多くの皇帝が即位しては殺害されるという、軍人皇帝の時代を経験した。そのような軍人皇帝の一人であったウァレリアヌスが、ササン朝との戦争中に、ササン朝皇帝シャープール1世によって捕虜とされたことは、この時代を象徴する事件であった。このような混乱の時代は、3世紀末（284年）に即した、最後の軍人皇帝であるディオクレティアヌスによって、終わりを迎えた。ディオクレティアヌスは、帝国各地の問題に対応するために、広大な帝国領を4分割し、東西・正副の4人の皇帝で統治する、テトラルキアをしいて、政治秩序を回復した。

(出題意図)

近年、後期ローマ帝国の研究が盛んである。新しい学説は、従来のように、五賢帝以降のローマ帝国を衰退のはじまりと見るのではなく、変容の時代と見るのである。そのような研究状況をふまえて本問は、五賢帝以降の基本的な動向を把握しているかどうかを、問うた。

(B)

19世紀のオスマン帝国では、軍事的な圧力を増していた西欧列強諸国に対抗するために、国内の改革が求められていた。1839年には、スルタン・アブデュルマジド1世により、宗教にかかわらず、諸帝国民の法的平等を認める、ギュルハネ勅令が發布され、タンジマートと呼ばれる、大規模な西欧化改革が開始された。クリミア戦争後の1876年には、立憲君主制への要求にこたえるため、大宰相ミドハト=パシャの起草したミドハト憲法が發布された。同憲法によって、全臣民は「オスマン人」として扱われ、議会も開設された。しかし露土戦争が勃発を機に、と時のスルタン、アブデュルハミト2世は議会を閉鎖し、憲法を停止して、パン=イスラーム主義を利用した専制政治をおこなった。

(出題意図)

2023年はオスマン帝国解体、トルコ共和国成立から100年にあたり、日本においても近代トルコ史関連の書籍が複数出版された。近代トルコの成立の起源は、19世紀の西欧化改革に求められるであろう。そのような考えにもとづき、本問は、19世紀の西欧化改革の基本的な流れを把握できているかを問うた。

(C)

文化大革命以後、華国鋒に代わって主導権を握った鄧小平は、階級闘争をやめて、外国から技術や資本を導入しながら、低迷した経済を発展させることを目指す改革と対外開放政策を推し進めた。農村では人民公社を解体し、生産請負制を実施して、農民の生産意欲を高めようとした。また、小規模な農村工場（郷鎮企業）が生まれ、地元幹部の才覚次第で農民に収入を得る可能性が開かれた。ま

た、外国資本・技術も導入され、国営企業にも改革を促し、広東省の深圳などに経済特区を設けて外国からの資本を導入した企業を誘致して、輸出向け加工業を発展させた。

しかし、民主化なき経済改革への不満などがつもり、1989年、学生や青年労働者による民主化要求運動が起こった。政府はこれを軍隊によって鎮圧し、民主化運動に理解を示して趙紫陽総書記を解任して江沢民を後任に任命した。

その後、中国は天安門事件の後、一時的に改革開放政策が停滞したが、鄧小平は1992年、中国南部を視察して経済発展を目指す政策を打ち出した。中国は、外国企業の投資を受け入れ、海外の技術も吸収しながら、安い労働賃金を利用して輸出向け製品を生産していった。このように中国は、社会主義を掲げながら、市場経済を導入する社会主義市場経済を進めた。

1997年、鄧小平が死去して、国家の指導権は江沢民に引き継がれたが、共産党支配を堅持したまま経済の改革開放路線が進められた。こうしたなか、1997年、香港が、1999年にはマカオが中国に返還されたが、これらの地域は特別行政区として高度な自治を行う一国二制度によって中国に組み込まれた。

(出題意図)

本問は、歴史学科志望の受験生に限定した問題である。ある特定の地域・時代にかかわる歴史事象を、字数制限を設けずに論述させることによって、その理解度および文章表現力を試すことを目的とする。

文化大革命以後の中国の動向、特に鄧小平が改革・開放政策を推し進めたこと、その過程で人民公社が解体され、生産請負制が導入されたこと、民主化なき経済改革への不満によって天安門事件が起こったこと、その後、停滞した改革開放政策を進めるため外国技業の投資を受け入れられていったが、中国では社会主義を標榜しながら市場経済を導入する社会主義市場経済を導入したこと、そして、返還された香港・マカオでは特別行政区が設置され、「一国二制度」が導入されたことなどを、手がかりとなる語句を示して理解を問うた。以上のような点を中心に、語句の正確な理解、史実経過に対する確かな把握、論理的な説明を含めて評価を行った。